

〈物吉繁多〉という男

——室生犀星「杏つ子」からの一問題——

大橋 毅彦

1 「異土の乞食」を超えるもの

犀星文学に見る〈乞食〉及びその変奏の諸相というテーマをたてて考察を始めようとする時、まず思い浮かぶのは『抒情小曲集』所収の詩「小景異情（その二）」に出てくる「うらぶれて異土の乞食となるとても」であろう。故郷喪失者として都会を彷徨う詩人の裡に生じる屈辱と誇り、故郷に対する愛憎半ばする思いを歌った、人口に膾炙された作品の一節である。

ところで、この詩句が示す〈乞食〉のイメージを折口信夫の長詩〈乞丐相〉のそれと比較して、前者における感傷の狭小さを指摘したものに山折哲雄『乞食の精神誌』（弘文堂 昭62・

3刊）がある。人間の精神史の闇を照射するために〈乞食〉の歴史的転変の相を追尋しようとするこの書のモチーフに照らせば、なるほど折口の作に表れた乞食願望は、古代の来訪神のイメージとリンクして積極的に評価すべきものに見え、それに引き換え「異土の乞食」の方は、それ自身社会の汚穢や恥部を象徴する烙印を押されてあるばかりか、〈乞食〉という存在がそういう地点へまで零落していかざるを得なかつた歴史に向けての思考回路を開いていかない、あまりに個人的な不遇な境遇のメタフアーとしてしか見えてこなかつたのにはちがいない。事情は同じ詩集の「銀製の乞食」を取り上げてみても、それが社会の凡庸さに対峙する芸術家が身に負う受苦と栄光とのメタフアーとして出現しているかぎり、やはり変わらないだろう。も

ちろん、そうであるからと言って犀星詩の〈乞食〉のイメージが貶められることにはなるまい。乞食の存在論的意義とでも呼ぶべきものに深く測鉛を垂らすものとはなっていないにせよ、「異土の乞食」も「銀製の乞食」も文字として見た場合には、一作品空間の中で自律した機能を失ってはいないと思われるからである。

だが、それとは別に、犀星の作品における〈乞食〉の系譜には、はたして如上のような位相を持つもの以外は見出せないのであろうか。そのようなことはけつしてない。一揆の形姿をまとった乞食集団を登場させた泉鏡花や、大正コスモポリタンのな発想の一変奏として乞食の住む幽冥世界への憧憬を示した佐藤惣之助の場合⁽¹⁾とはまた異なった位相を持つ、賤民視された人々と彼との間に取り結ばれた共生感のありかたを予想させる形象が析出できるはずである。従来の犀星研究が看過してきたこの問題を、十全とはいかないまでもここで掘り下げてみたい。そのモチーフに火を点けに来た男、すなわち「杏つ子」に登場する物吉繁多という男に注目することから始めながら。

2 〈坂本民部〉と〈物吉繁多〉

室生朝子「大森 犀星 昭和」(リプロボート 昭63・4刊)中の「引つ越し」は、父犀星とともに大森谷中から馬込へと居を移した頃(昭和七年)を回想した文章だが、その中に次のような一節がある。

現在の環状七号線は、昔は谷中通りといった。(略)その空地にはいつも植木屋が何軒か集り、植木を並べていた。そこで犀星は、植木屋の民さんという人と知り合った。民さんはその後犀星が亡くなるまで、庭のすべてを手がけた人であった。本名は坂本民春という立派な名前である。「杏つ子」のなかでも、「坂本民部助」という名前で登場するが、随筆にも度たび出て来る植木屋である。

たしかに、「僕の家」(「新潮」 昭7・6)という随筆には、「杏つ子」にもある新築なった家に箆を打ち込むエピソードとともに植木屋坂本民部が登場しており、新潮社版全集別巻二所収の日記を繰ってみても、たとえば昭和二十八年四月十二日のところに、久しく出入しなかった民部こと民春⁽²⁾に垣根作りを依頼した旨を記した文章を見出すことができる。こちらの方はや

がて小説「生涯の垣根」(「新潮」昭28・8)へと昇華していくであろう。

だが、犀星の自伝的小説の集大成と言われる「杏つ子」には、実際問題として坂本民部助という人物は出てこない。この作品の中で、小説家平山平四郎の新居に鎧を打ち込むことも引き受けている植木屋は、物吉繁多という男なのだ。

〈坂本民部(民春)〉と〈物吉繁多〉——両者を比較すればいくつかの相異点を指摘することは可能である。しかし、その中でもとりわけ興味をひかれることはと言えば、「僕の家」で「僕」が坂本民部に対して抱く親和感、あるいは「生涯の垣根」の「彼」と「民さん」との関係から読みとれるそれと同じ心性といったものを基本的には受けつぎながらも、その親愛の対象となる人物の名前として、新たに物吉繁多が選ばれた事実、これである。なぜなら、この〈物吉〉という姓の来歴を犀星の郷里金沢の歴史に尋ねていった時、それが旧藩時代における被差別民の一部を指す呼称であったという問題に達着するからである。

まず〈物吉〉の存在形態というものを、田中喜男編「加賀藩被差別部落史研究」(明石書店 昭61・8刊)中の概説を借りて確認しておこう。

物吉は石川郡広岡村地内に集住し、家業として竹ノ子皮革履・足駄緒を製作し、侍・町家に祝いごとがあると出かけ、「ものよし、ものよし」と家人を呼んで祝い言を述べ祝儀を得た。領主の救恤、町人の施行に際しては藤内と共に米を町民に配り、かつ施米の一部を得た。また、乞食のうちハンセン氏病患者があると引取って看病し、死ぬと死骸を近くの三味に埋葬したことから痲瘋とも呼ばれた。天明三(一七八五)年には一五、六軒集住していたが、藤内頭の支配下にはなかった。

こうした属性がただちに物吉繁多に流れ込んでいくわけではもちろんない。しかし、物吉繁多の形象の一面に、共同体から疎外され歴史の澱を潜り抜けてこなければならなかった人間達の生がまとった光と闇とが刻印されていること、これは否定できないのである。ただ、そこに進む前に、被差別民たる〈物吉〉の概念が犀星の裡でどのようにして蓄えられ醗酵していったかについて、若干検討しておきたい。

3 〈物吉〉姓発想の背景

堀田善衛の自伝的小説「若き日の詩人たちの肖像」(「文芸」

昭41・1(43・5)の「第一部」に、北陸の没落した旧家出身の主人公の少年が、かつて金沢の郊外の小さな町のレヴュー小屋にいた娘百合文子と浅草で再会し、こんな会話を交す場面がある。

しかも彼女は、

「あたし、それからね、あの、トーナインのよ」

と言う。

少年はそれを知っていた。しかし、この場合は、やはり、

「トーナインって何？」

と訊きかえすのが礼儀というものであらうと考えた。たとえそれが相手に説明を強いることになり、本当には礼儀にも何にも反することであるとしても……。

「トーナインってね、ほら……」

文子は両の手の指を、タマネギと乾しエビをうどん粉のなかでぐじゃぐじゃにしたものののつた鉄板の上にさし出して、左の親指を曲げてかくした。

「知ってるでしょう？」

「うん」

「それなのよ」

いまは浅草の花月劇場の踊り子に出世した文子が、自身がこ

れまた〈藤内〉なる賤民の出であることを告げる場面であるが、ここではこの種の事柄がその地の出身者の間ではかなり知り渡っていたこと、そしてその知識や情報の伝播が活字というメディアを過ぎずとも、ここで見るような生々しいしぐさも含めた会話や風間に接する体験をも持つという形でより日常的に行われていたことに注意したい。この小説の作者よりひとつ上の世代に属する犀星の金沢における生活圏の中には、おそらくこうした伝播網がいつそう強く張りめぐらされていたにちがいない。そして、そこから得た刺激が犀星の内部で伏流していき、時折間歌泉のように噴出してくるのだ。「杏つ子」以外にそのよい例が、〈藤内〉の職掌の一つである刑の執行を前職とした赤座平右衛門が登場する「神々のへど」(「文芸春秋」昭9・11)がある。いわゆる史実小説と呼ばれる作品群にも、特殊な生業をもち常民社会の周縁で生きる人物を登場させたものがある。さらに、例の「小景異情」にしても、そこに出てくる「乞食」に付された〈かたい〉という読みそれ自体は、〈物吉〉の別称〈かつたい〉(「痲瘋」とリンクするものとして受けとれもしよう。

以上の点を前提とした上でもう一つ、やはり〈物吉〉に関する文献を犀星が参照していたかどうかという問題にも触れてお

きたい。関東大震後一時帰郷していた大正十三年二月十四日の日記に、「夜南圃氏来る。「金澤故蹟史」を借る」とある。もしこの書物が、旧加賀藩士の郷土史家森田祐園の手になる「金澤古蹟志」(明25自筆本・明36加筆訂正本)を謄写したものだとなれば、その巻廿一の「仁蔵・三右衛門来歴」や「物吉之来歴」が犀星に一つの知識を提供したという予測が立てられる。

ところが、この前年すなわち大正十二年九月に、タイトルは同じ(ただし漢字表記に若干の違いあり)だが前者とは異なる「金澤故蹟誌」なる本が出ている。和田文次郎を代表者とする加越能史談会によって発行された五〇頁程の小冊子だが、犀星が俳人太田南圃から借りたのはこちらの方であった可能性が高い(「金澤故蹟誌」の「誌」という文字が日記で「史」となっているのは、この場合犀星の誤記であったと思われる)。というのも、この書の後付に同会の出版物として「金澤墓誌」の広告があるが、そこに原輯者尚軒和田文次郎の名前と並んで「南圃太田敬太郎氏補輯」とあるからである。おそらく、自分の関わっている史談会が半年前に出したハンディーな郷土史入門書を、犀星の無聊を慰めようとした南圃が彼のところへ携えてきたと考えるのがいちばん自然ではなからうか。で、この書物の見方はと言えば、そこに〈藤内〉や〈舞々〉についての記述は見

えても、〈物吉〉についての言及はない。そして、この点以外にいまの問題についての考察に寄与する、郷土史ないし加賀藩部落实関係の文献に犀星が接した痕跡は、資料的には何も残っていない。

ところが、先の「金澤古蹟志」巻廿一「仁蔵・三右衛門来歴」に収録された、宝暦十二年に非人頭七右衛門はじめ七人の非人頭が藤内頭三右衛門・仁蔵に宛てた書付の中に「私共七人、先年より御當地非人頭被為仰付(略)其上諸事御用御繁多御座候處」云々という文句が出てくるから事は面倒になる。貴務の軽減を願い出ている訳だが、その中で仕事の多忙さを意味するために使われている「繁多」が「杏つ子」の物吉繁多と付合するからである。また、日置謙の校訂による「異部落一卷」が石川県図書館協会から郷土図書叢刊の一冊として刊行されたのは昭和七年であったが、そこに収録された史料のうち〈物吉〉の実態を把握する上での手掛りとなる、天明五年の藤内頭三右衛門・仁蔵の報告書の中にもこれと同じ趣旨の「繁多」が出てきている。偶然の一致だろうか。

たしかに物吉繁多は平四郎一家のために一肌も二肌も脱いでいる。さまざまな仕事を引き受けており多忙である。そこから繁多という名前が、これらの書とは無関係にごく自然に発想さ

れたのかも知れない。日記に出てくる「金澤故蹟史」は「金澤古蹟志」とは別物の可能性が高いし、「異部落一卷」を扉星が読んだ証拠もない。だが、物吉繁多の名の部分がこれらの書に起因することは絶対により得なかつたと言いつけることもできないのである。一つの疑問として提出しておく。

4 〈物吉繁多〉という男

「杏つ子」に戻ろう。平四郎がふとしたことで出会った物吉繁多が、被差別民としての物吉の系譜につながる歴史的な闇を抱えた人物ではないかと推察できるのは次の一節に拠る。

平四郎は綱を手に井戸底に下りて行く間際に、この男はど
ういふ素性の男だらうかと、そんなことが気になつた。一度
下りると二時間はあがつて来なかつた。地下十メートルには
何も無い、泥水だけの世界だつた。

〔第四章〕「家」——「呑まれる手」

物吉繁多が平四郎に頼まれて新庭に井戸を掘る場面だが、繁多が「綱を手に井戸底に下りて行」くまさにその時に、この男の素性が謎めいたものとして平四郎に迫ってきたというのは印象的だ。なぜなら、彼のその姿が、彼が日常世界の住人には踏

み込み得ない世界とも交渉を持つ人物であることを予覚させるからである。「明りも何も無い」「井戸底」の世界とは、安定した体制の側からはうかがえぬようなまがまがしいものが跋扈する世界の象徴であるかも知れないし、そこに溜つた「泥水」は、時の経過につれてある種の人間の生の上にはますますのしかかりそれを抑圧していく、負性を帯びた歴史的社会的な濃（か）を示しているのかも知れない。さらに言えば〈井戸掘り〉ないし〈庭園・植木〉関係の仕事が、それらの技術が帯びる呪術性や潜目としての性格から、中世における賤民の職掌となつており、かつまた現在でも伝統的な部落産業の一つとなつている事実を指摘することができる。⁽⁴⁾

ともあれこういう一点をとつただけでも、物吉繁多という男が帰属する世界の曖昧性、日常の秩序を脅かす一種の不気味さが浮かび上つてくるわけだが、しかしひるがえつてみるに、「杏つ子」のモチーフはこうした世界の住人達を登場させることにもあつたのではないか。そしてここが重要なのだが、彼らは出てくるたびに主人公父娘の心に何ものかを贈り、もつて一種の心的共同性を取り結んでいるようなのである。そのモチーフの一端は、この新聞小説の連載第一回目に次のようにさりげなく示されていた。

人間は或る地位に達すると、たとへば家庭の父親であつても、大臣とか高官とか、えらい音楽家になつても、時々、彼自身の地位とか名譽とか信頼とかを、或る日には見事に叩き潰して出直す必要がある、得体のわからない仲間のなかに、自分を見さだめることで、さらに人間といふものを建て直して見たいのである。

(第一章「血統」——「蟹」)

はじめて登場した時に、「ただ彼は雲のごとく突立つてゐた」と紹介されていた、「この雲のごとき男」「このへんな、ぬうとした煙突に似た男」(「家」——「雲のごとき男」)イコール物吉繁多も、「得体のわからない仲間」の一人であつた。

物吉繁多が鏡を打ちつけるその響は「家といふものを確かりと、なにか、平四郎自身のもの結び合せてゐるやうに感じ」させ(「家」——「職」、彼が息子の太一に対してしてみせた手荒な説教は平四郎を「久しぶりで爽快」(「家」——「仕事」)にし、自身の仕事に対する意気込みを取り戻させていく。平四郎の二人の子供が同じ日のうちに伝染病に罹つてしまつた時にも、彼を支えるのは繁多である。これよりも前、彼繁多自身は太一を鉄道事故で亡くしているのだが、二人の入院騒ぎに取り紛れた状態から束の間解放された時、物吉繁多と平四郎の間には「変な親密感」(「家」——「門」)が生じ、「なにかが通じてゐるやうな気がし」(「家」——「三つの不倖」)だしていくのだ。

この精神的なつながりは表層的には、平四郎と物吉繁多がそれぞれ、相手の抱いている子供への愛情を感じとりそれを共有した点に起因しているとは言えよう。だが、そうであるならばなぜ、子供を持つ親のうち、のちに平四郎が自分と娘の誇りを守るためにどなり込みに行く鳩井夫人や野村技師でなく物吉繁多が選ばれたのだろうか。しかも、その息子太一が懺死という何かまがましい印象を与えてくる形での死を遂げ、かつまたそれが一種のスケープゴートとして機能したからこそ、平四郎の子供は死を免れたのだと思わせるような形で、「物吉」という呼称に揺曳する響が、またここにも顔を覗かせているような気がする。

まだある。それから四年後、今度は平四郎の妻りえ子が脳溢血で倒れるのだが、この時には物吉繁多は「水を砕いたり小物の用事をしてくれ」(第五章「命」——「嬉しい日」)ており、また一家揃つて軽井沢に疎開する折にも、彼は上野駅の溢れ返る群衆の中で、歩行困難となつたりえ子をおぶつた姿を現している(第六章「人」——「上野」)。とくに後者の場合、室生朝子「父室生犀星」(毎日新聞社 昭46・9刊)によれば、実際の同道者は「体格のよい軽井沢の植木屋」であつたことからして、

作中人物吉繁多の「援助者」的性格はいっそう強められることになる。

もつとも平四郎一家の危難を救うのは、物吉繁多一人に限つたものではない。娘の病室でりえ子と向いあつた折の平四郎の感懐が示すように、出産直後のりえ子を地霊の大火から守つて上野公園まで避難させた丸山看護婦や、そこへ平四郎とともに駆け付けた長井という俵屋もそうであつたし、かつまた彼らは、少くとも「得体のわからない仲間」に属する者ではない。

だが物吉繁多の平四郎一家への関わりには、何かそれ以上のきわだつたものが感じられる。彼は、平四郎が救いの手を欲している時に、何処からともなく、しかし「平四郎といふ人間を見抜いてゐる」「平四郎のなにかを搜り当てた」(第四章「家」——「雲のごとき男」というように、そうすることが定められてあるかのような確かさをもつて不意に現われ、平四郎に対する援助を果し終るとまた忽然として姿を消すのだ。

その到来が待ちのぞまれもすれば、事を果せばけつして引き止められたりはずに、それも当然のこととしてその還つていく姿を見送られる人物。こうした属性は、折口信夫の説くあのマレピトのイメージから水脈をひくものとして捉えられないだろうか。マレピトとは本来的には、海のあなたから古代の村々

に來り臨んでその村全体の生活を幸福にして還る靈物とされていたが、時代が下るにつれてその訪れる範圍が、「一家の私の祝福」の上にも広がり、またその出自も常世の国からのおとづれ人ないし「やつした神の姿」という位相から、「唯の人としてのまれびと」「衣帯よびたの知れぬ遠處新來の神」へと移行した点を折口は指摘している。平四郎一家の危難を救いにしばしば訪れる「得体のわからない」男物吉繁多は、こうしたマレピトの信仰の歴史的變化の過程と対応するのではないか。

彼が力を貸し与えるケースのうちのいくつかは、平四郎の家族のうちの誰かが病氣になつた場合であるのだが、これもまた折口がマレピトの臨時のおとづれとして、「婚礼の時」「酒を醸す時」と並べて挙げている「病氣の時」⁽⁶⁾とつながる。そればかりではない。マレピトの職掌の一部が「建築物の堅固」の祝福にあり、そのマレピトから分れて発生した浮浪祝言師としての「物吉」の仕事もまた「屋敷をゆるぎなくする」ための祝言を唱えることにあつた点、⁽⁷⁾それを引き継ぎ具現化したものとして、物吉繁多が新築なつた家に打ちつける鏝の堅固な響を聞きながら、平四郎が一家の明日が予祝せられているような感慨を抱いている場面が想起されるからである。

こう見てくると物吉繁多という男が、共同体の埒外に置かれ

て賤視の対象とされていた人々の血をひくとともに、彼らがそれ以前にはまだ自分達の生にまとい得ていた栄光ないしはハレの側面をも受けついでいることがわかる。そして、こうした歴史的な混沌の中から立ち上がってくる者と平四郎との交感、その反復の構図に少しく注意を払っていくならば、従来の〈父娘〉という統括軸の中で、生理的・感覚的実感を自らの生きる根底に据えた「一種の体当り主義」的な作家氣質を炙り出していく「杏つ子」の読みに、ひとつの亀裂をもたらし得るのではないか。この視座を有効にしていく指標を物吉繁多以外にあと一二、同じ作品の中から拾っておくことにする。

5 「得体のわからない仲間」たち

その一つは、平四郎が彼女の「素性を知ること」を自分からすすんでしなかつた養母青井のおかつの過去が、「旧藩時代の処刑執行人」本間左門の情婦というものに設定されている点である（第三章「故郷」）。「藤内は公事場江相詰、拷問、殺人等之裁許并掃除等仕、且又隣・獄門・さらし者・町中渡者・御追放者等之刻も罷出相勤申候」とあることからも、左門の出身階層はこれまた被差別部落民たる（藤内⁹）であつた可能性が高

い。その左門との情交を繰り返し「あんたが首切りの名人ならわたしや緘め手の名人だ」と放埒な生の姿態を示していた若き日のおかつはその時点で、左門がその出身階層ゆえに不浄役人という形で背負わされたのと同じケガレのしるしを、自身の生の上に刻印されたのではなかつたのか。彼女の秘密を暴いた、いまはもう老醜をさらしている左門の同役渡瀬兵馬が、由緒正しい老婦人のようななりに納まつてしまつたおかつの変貌を嫉視している点にそれは逆説的に示されているし、おかつもまた過去の亡霊がいまなお自己を脅かすものたり得ていることを自ら証明するかのように、彼女と兵馬との間にある戸を閉め切つてしまつている。だが、そういうおかつが人生の終わりに到つて平四郎に「何事も突きこんで来てをしへた不滅の教師みたい」な印象をもたらしている点、そこには作品の冒頭で予示されていたあの「得体のわからない仲間」との連帯・共生のモチーフがやはり交響しているように思われるのである。

もう一人の人物は、「第七章 水原地帯」で軽井沢に疎開した平四郎・杏子父娘の前に現われる絹村劉子という女性である。平四郎にあてた手紙に「どうぞわたくしといふ者の素性を調べてくださらぬやうに」という言葉を書きつけたこの女は、憲兵の内報係という仕事を三年ばかり続けており、その間に生じ

た心の孤独を癒すため無名の贈物を平四郎一家に贈りながらも、やがて情報漏洩の嫌疑をかけられて町から去っていく。たとえそれが強いられたものであつたにせよ、彼女が選んでしまった職業は、同じ町に疎開してきた「ある高貴の人」の身分とは対照的な社会的な後ろ暗さを際立たせるとともに、ここでもやはりかつての「藤内」が、「内密御用」「目明し」などと呼ばれる密偵の役目を勤めていたという事実を想起させる。領主権力機構の尖兵として馴服せしめられる一方で、町人・農民の側から放たれる侮蔑の眼差しに射竦められもしなければならなかつた彼らの立場は、憲兵から自由を奪われて「わたくしといふ女は鉛か銅で作り上げられてゐるやうに、人間のあたたかさを三年ばかりまるで知らないでゐ」た、そして杏子の友人亮吉をはじめ町の誰からも疑いと怪しみをこめた視線を投げつけられている絹村劉子のものであろう。

しかし、そんな人物がここでは平四郎のみならず杏子に対しても、あの物吉繁多と平四郎との間に認められたのと同様な「物柔らかかな親和感」を示していくのであり、さらに重要なのはこの親和感をより決定的なものにしていく契機として、次のような出来事が用意されている点である。

凍みがとけた或る朝の楓の下に、真白い卵が七つ置かれて

あつて、あざやかさは春寒い庭の景色を、一ところに冴えた色を集めてゐた。杏子はそれを見てゐると、なにかの不倖がこの美しい卵に物語られてゐるやうな気がした。(第七章

「氷原地帯」―「尾行者」)

ここで杏子が感じた「なにかの不倖」とは、卵と一緒にあつた手紙の文面に従えば、表層的には憲兵の手先となつた劉子が「仕事の重圧」や「絶対的な孤独」に苦しんでいるさまを指すとは言えよう。しかしそれだけではあるまい。劉子が人知れず置いていった「七つ」の「美しい卵」が語る不倖は、遠い過去において生れたばかりの我が兎平四郎が買われていった青井のおかつの家の台所の板敷の上に、「あんないを乞はず」に「七つとか九つとか」の「卵」を「いのるやうな氣」で届けていたお春という女の不幸(第一章「血統」―「不義密通の餓鬼共」・「あれを見よ」)とも共鳴しはじめるのである。まだ杏子が赤ん坊だつた頃、父平四郎は久方振りに訪れた故郷の、その時には亡き者となつていたお春が住んでいたと道聴きした赤門寺に続く藪道で、竹林のこまかい震えを見やる自分の眼の上に彼女の眼を感じとり、彼女の魂と交感する体験を持った(第三章「故郷」―「逢へた人」)。そして今度は杏子が、平四郎の母の声にならない声に時空を超えて聞き入ろうとしていくので

ある。この時杏子の前にある「真白い卵」は、彼女と血のつながる者がかこつた嘆きや悲しみを宿らせる一種依代的な性格を持ち出している。それを運んできた絹村劉子は平四郎・杏子にとつて心的共同性を取り結ぶ者として登録されもすれば、祖先を含めた死者たちの棲む他界から遣わされた使者、時間的な漂泊を体现するマレビト的な位相を示す存在たり得てもいこう。実際には清水某という憲兵によつて挙動を探られていたネツケル一家に代えて、この不幸な絹村劉子という女が登場する必然はそういうところにもあつたと考えられる。

6 赤座像再考

平四郎にまかされて庭仕事についた物吉繁多の姿はこう描かれている。

植込みをするための相当大きい雑木をはこぶ荷車に、物吉は乗り込んで車の廻し方を人夫に指揮をし、顔ぢゆう泥だらけであつた。物吉がこれらの仕事の打込み方はすばらしく、精悍であつた。その植木の擔ひ方、石壇をのぼるための用意も、彼はまめに氣をつかつた。(中略)

滅多に冗談は言はない男だが、たまに、吹つ飛ばす言葉は、

何時も同じ種類の言葉であつた。

「そんなことでは食へないぞ。」 (第四章「家」——「或る生涯」)

生涯)

この「精悍」な仕事ぶりにおいて物吉繁多との間に類縁性が認められる人物を犀星の他の代表作に捜すとなれば、「あにいもうと」(文芸春秋) 昭9・7)の赤座がまず思い浮かぶ。そしてこの小考がモチーフとしていることと繋がる問題を、赤座という男も顕在化させていると思われるのだ。最後にその点について考察しておきたい。取り敢えず右の視点から物吉繁多と共通してくる彼の姿を確認しておこう。

投げ込む石はちから一杯にやれ、石よりも石を疊むこちらの氣合だと思へ、へ夕張るならいまから襦衣を干してかへれ、赤座はこんな調子を舟の上からどなりちらしてゐた。てめえの禪は乾いてゐるではねえか、そんな禪の乾いてゐる渡世をした覚えはないおれだから、そんな奴はおれの手では使へない、赤座はそんなふうで(中略)七杯の舟に石積みの手分けをし、蛇籠止の棒杭を打つものを裸で水の中へ追ひ込み碩では蛇籠を編む仕事をひと廻り查べると舟を淵の上にとめて水深に割宛てられる蛇籠の数をよんでゐたりした。

杉山平助の「横光利一と室生犀星」(「中央公論」 昭10・

9) 以来今日に至るまでの「あにいもうと」評は、赤座のこうした姿に社会の底辺に生きる人間のたくましい生活ぶりを見取ってきた。しかしそういう理解の仕方は、たとえばその点から同時代のプロレタリア文学の衰退現象の内因を逆照射するとか、いわゆる〈野性〉や〈肉体〉のモチーフを押し出した昭和の作家達の作品と屎屋作品との連結面に注目するとかいうように、文壇乃至文学史的にはそのままでも有効な視点とはなり得ても、この後にくる「続あにいもうと」(原題「神々のへど」へ「文芸春秋」昭9・11)にも登場する赤座像とのつながりを解き明かす上では、より深く考察し直さなければならぬのではなからいか。つまり、その前身が「加賀藩の処刑場の槍のつかひ手」であり、死して後もなお、娘のもんをして彼のひきずる罪や穢れを生々しく感じさせる「続あにいもうと」の赤座平右衛門の前に、土性骨のあるたくましい風貌の「あにいもうと」の赤座をただそのまま持ってきただけでは、あれとこれとはつながらないのである。その結果「あにいもうと」では作者は何処までも厳肅な態度で現実を切り下げて行つたのだが、此の作では作者は少し観念的に墮してゐる(略)うっかりすると此の物語はありふれた因縁話に思はれさうだ」というように、二作を切れたものとして扱ふ評言が出てくる。あるいはまた、両者の脈

絡をそれに取り組む「作者の内面の熱量というところ」に求めた伊藤信吉の見解が、ここでの問題にひとつの解決を与えてくれているかもしれない。だが私は、あくまでも作品の中にするされてあるものなから両者のつながりを探つていこうと思う。

たしかに赤座という人物、二作を一瞥するかぎり全くの別人物として設定されているかのごとき印象を与えてくる。それは、先に記したような後ろ暗い過去を持ち、そしてその過去を消すために川師仲間の中に身を投じた「続あにいもうと」の赤座とは異なり、「あにいもうと」の赤座の生い立ちが次のように語られている点に注目しても肯うことができよう。

七つ時から礫で育ち、十五で一人前の石追ひができ、蛇籠の竹のささくで足を血だらけにして育つた赤座は、出水の泥濁りを見るたびにおそろしいもんだなあとと思ふが、どうしてそんな出水が恐ろしい百数十本のせぎの蛇籠を押し流してしまふかが分らなかつた。二十ころから一本立になつても蛇籠のこしらへは一年ともたたないで流されてしまふが、やつと川底の分だけはいつも残つてゐてそれだけでも仲間では「赤座の蛇籠」としてほめられてゐた。

けれども同時に、ここでの問題を解き明かすための鍵も、こ

の一節には隠されているのではないか。沖浦和光「竹の民俗誌——日本文化の深層を探る——」（岩波新書 平3・9刊）は、日本文化の深層すなわち差別され抑圧されてきた民衆によって担われてきた〈賤民文化〉の表徴としてある、竹細工の歴史を追うことを一つの眼目とする書だが、そこで明らかにされる卑賤視された人々と竹との関わりの中には、いま見た赤座の生い立ちを彷彿させるものが見出せるのである。たとえばこんな一節がある。

（前略）タケの移植法が広く知られて、あちこちに竹藪が造られるようになったのは中世も後期に入ってからである。江戸時代に入ると、各藩では、河川の治水のために積極的^に河原に竹林を造成していった。土地がないので川筋や河原に住んでいた貧しい民が、そのような治水工事に動員されたので、地縁的にも竹藪との結びつきが深くなっていった。

（第六章「竹細工をめぐる〈聖〉と〈賤〉」）

これと、「七つの時から碩で育ち」「蛇籠の竹のささく^れで足を血だらけにし」「そのやうな眼はただ川仕事をするだけに生れついでるやう」な赤座とを比べるならば、彼もまた〈機多〉・〈非人〉、あるいは「続あにいもうと」の赤座の前身が示す〈藤内〉という身分ではないが、河原の外の世界へは一步

も踏み出さない、村落共同体の側にある者からすれば彼らの周縁に生きる者として、やはり卑賤視扱いされていかなければならなかった人々の系譜に近づいていくのである。底辺の労働者像とは言っても、こうした赤座像は、いわゆる近代的な労働者階級のイメージを大きく踏み越えてしまっているのである。

もつとも「竹の民俗誌」が説く賤民の生活形態と赤座のそれとが全く重なるというわけでもない。竹を一人前に取り扱える技術を身につけるには長年にわたる努力と忍耐が必要であるとしながら、その結果出来てくるものとしてこの書の中で注目されているのは、〈蛇籠〉ではなく〈箕〉・〈籠〉・〈爪〉といった竹細工であったし、また人夫頭としての赤座からは貧に窮したイメージを抽出することはできない。箕直し、人外の民という観点だけなら、むしろ佐藤惣之助の捉えた世界⁰⁹の方が近い。そこでもうひとつの視座を用意してみよう。作品の舞台となる碩が「秩父の山」を臨む位置にありながらも、「雪解時の川の迅い出水」や「新鯉」に注目すれば、犀星の郷里を流れる犀川のイメージとも重なってくるのは自明のことだが、そのことを前提として碩仕事に精出す赤座を再検討すると、かつて加賀藩に〈穴太〉と呼ばれた職人が存在していた問題が浮上してくるのである。

北垣聡一郎「石垣普請」(「ものと人間の文化史」シリーズ

58 法政大学出版局 昭和62・3刊)によれば、「穴太」とは

広く城郭石垣の築成者のことで、その呼称は彼らが近江国穴太に本貫を置いたことに起因する。古くは五輪塔や石臼の製作にあたっていた伝承をもつ彼らが、近世城郭における石垣築成者としての「穴太衆」へと脱皮成長していく過程を綿密に跡付けていったこの書の終章「加賀の穴太とその普請」で、氏は加賀の前田家が、戸波清兵衛・穴太源太左衛門をはじめとするその多くは近江穴太の出身で、後何代にもわたってその技術を伝承していった「穴太」を擁していたこと、及び彼らの高度な技術が城郭普請のみならず他の分野、たとえば橋台普請や川除石垣の構築などにも活かされていった点を指摘している。このすぐれた技術(それは「穴太積み」と呼ばれ、石配・栗石・裏詰などさまざまな項目に分たれ伝授されていた)を河川普請・護岸工事に応用していく彼らの姿が、「蛇籠に詰める石の見張りが利いてい」て、「蛇籠の底ほど大きい石で固め、あいだに小型の石を投げ込ませ、隙間もなくなたみ込むやうに命令し」ている赤座の姿と重なってくるのである。また、同書が掲げる一史料からうかがわれる、「穴太」とその支配下にある扶持人石切・二十人石切らとの仕事の現場を離れた親密な交流図と、赤

座を頭領として仰ぎその妻りきを婢仏として慕う人夫たちによって「磧が一杯に声をそろへて、賑うてくる」光景との間にも、なにほどかの共通性が認められるだろう。

だが、ここに見る「穴太」は、百石とか三百石とかいう知行を得た存在だった。これは見方を変えれば、幕藩権力の確立するなかで特殊な技能集団としての「穴太衆」がその身分を固定化され、穴太頭支配のもとに再編成されていったことを意味する。いわば彼らは、その身分の保障を得た代償として政治機構の中に困い込まれ、制度の中に取り込まれていったのである。赤座にはそういう陰翳を認めにくい。制度化された空間にある者の側から見て、赤座が磧で作り上げる共同体は、何物にも介入されることなくそれだけで自立し得ているよりのびやかで自由な集団として映じてこないだろうか。そしてその点を押し進めていった時に、幕藩体制に組み込まれる以前の「穴太」の存在形態をめぐる仮説として、彼らが近江穴太にいた散所民で、そのすぐれた石積み技術や石材加工法をすでにその時点から持ち得ていたかも知れないことが注目されてくるのだ。散所に住まう者ゆえ、彼らは一面において卑賤視される存在であつたらう。しかし、技術が呪術と結びつき卑賤視されるとともに聖視されもした、あるいは「高野聖」の布教活動によって造塔に

拍車がかけられたこの時代にあつて、石を扱う職能集団としての彼らの生活は、一元的な支配—隷属の関係を越えた活力やエネルギーにあふれるものでもなかったのか。

このように赤座の形象には、〈碩〉という場所や〈竹〉・〈石〉をめぐる技術を指標として浮かびあがる、歴史の闇の中に葬り去られてきた賤民の数々のイメージが畳み込まれている。そしてまたさまざまな疎外と抑圧をうけながらも彼らが絶やしてこなかった生のエネルギーというものも赤座には刻印されているのだ。「統あにいもうと」に登場する処刑人という不浄職についた赤座、それゆえに娘一家におぞましい因果絵図をくり広げさせていく赤座が、共同体の埒外に追われた人間の生が担わなければならないケの部分に注がれる摩星の眼差しを意味するものであるとしたら、ここに見てきた赤座像は同じ人々の生に秘められたハレの部分を表出していると言えるだろう。二つの小説を内的に繋ぐ環はそういうところに求められると思われる。

〈注〉

1 鏡花作品については、たとえば東郷克美「泉鏡花・差別と禁
忌の空間」(『日本文学』 昭59・1)が、「蛇くひ」(『新著月

刊』 明31・3)や「貧民倶楽部」(『明28・7)に登場する乞

食像に照明をあてている。他方佐藤惣之助においては、たとえば「日本詩人」大正十一年一月号に「乞食と泥棒」という総題で掲載された詩篇の中に登場する「天へのぼるほど明るい巡礼」あるいは「どこか無有国の遊覧客」としての乞食のイメージが注目される。拙稿「佐藤惣之助の散文集『市井鬼』と

「凄氣之図」(『媒』 6号 平1・12)参照。

2 日記に馬込の庭をはじめ手がけたのが民春だと記されていること、「生涯の垣根」で垣根作りをまかされた「民さん」の過去が、「僕の家」に出てくる「坂本民部」のエピソードと重なることから、民部と民春が同一人物であることがわかる。

3 たとえば、「浅尾」(『中央公論』 大10・6)に登場する、「蛇つかひの小者で、へいぜいは藁草掘」で暮らしている仁右衛門。

4 野間宏・沖浦和光「日本の聖と賤中世篇」(人文書院 昭60・7刊)、赤坂憲雄「異人論序説」(砂子屋書房 昭60・12刊)

5 『古代研究』(大岡山書店 昭4・4刊)所収「国文学の発生(第三稿)」

6 同右

- 7 同右及び「国文学の発生(第二稿)」
- 8 吉本隆明「室生犀星」(「群像」昭36・5)をうけつぐ船登芳雄「室生犀星論」(三弥井書店 昭56・9刊)や、平野謙全集「第十二巻所収の昭和三十二年十二月・三三年五月の文壇時評、三三年十一月の新聞小説時評での評言を念頭に置いている。
- 9 「金澤古蹟志」巻廿一「仁蔵・三右衛門来歴」
- 10 田中喜男「加賀藩「藤内」の研究」(原田伴彦・田中喜男編「東北・北越被差別部落史研究」(明石書店 昭56・6刊)所収)
- 11 赤坂憲雄「異人論序説」
- 12 室生朝子「父犀星と軽井沢」(毎日新聞社 昭62・10刊)
- 13 自由を奪われた彼女の姿は、「亭主といふ「兵營」に住む女の兵隊」となっていく杏子の未来を予示する側面も持っている。
- 14 谷崎精二「文芸時評」(「早稲田文学」昭9・12)
- 15 室生犀星作品集第四巻「聖處女・あにいもうと」(新潮社 昭33・11刊)解説。
- 16 散文集「市井鬼」(京文社 大11・10刊)所収「練獄界即ち幽冥世界の隣りにある一つの世界について」(初出未収)や「霞気之図」(日向堂 昭6・1刊)所収の戯曲「星天の男女」(原題「野人の結婚」(「演芸画報」 大15・1)など。
- 17 穴太の一人後藤氏六代彦三郎がとりおこなった開樟院殿二百回忌の法要の記録(「法事留書」)
- 18 「石垣普請」が取り挙げた原田伴彦「石工と脱賤民化」(日本封建都市研究」 昭32、赤坂憲雄「異人論序説」

(一九九一・一〇)